

# SRID NEWSLETTER

No. 348 November 2004 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www1.odn.ne.jp/~cdv20180>

## 11月号

社会人大学院の立ち上げに参画して  
炭  
タシケントからスコピエへ

専修大学経済学部教授 田中 隆之  
(財)国際開発センター理事 豊間根 則道  
EBRD スコピエ事務所長 中澤 賢治

## お知らせ

1. 幹事会 11月17日(水) JBICにて

### 社会人大学院の立ち上げに参画して

専修大学経済学部教授 田中隆之

銀行調査マンを辞めて大学教員に転じてから、早くも5年半が経過した。2年前の当欄(*SRID NEWSLETTER*, No.314 JANUARY 2002)でも述べたように、大学「業界」も、わが古巣の金融業界同様、供給過剰という構造問題を抱えている。そのため、各大学では生き残りをかけて、新たな「市場開拓」、多様な「商品開発」が行われている。

そのひとつが、社会人大学院の展開である。周知のとおり、今春、多くの大学が法科大学院の設置に乗り出した。これらは、高度職業人教育を念頭に置き、一定数の実務経験を有する実務家教員を置く専門職大学院であり、法科大学院の他に会計やビジネスに焦点を合わせたそれが生まれつつある。

専修大学もこの4月から法科大学院に「参入」したが、実は本学における社会人大学院の発足はそれよりも古い。本学大学院経済学研究科では、4年前の2000年4月から、神田神保町にある神田キャンパスにおいて、夜間開講を始めた。社会人に焦点を合わせ、午後6時半以降と土曜日に行う講義だけの履修で、必要な単位が取得できるように設計されたものであり、我々はこれらの科目を「神田開講」科目と呼んでいる。入試も、従来の筆記

試験と面接の組み合わせだけでなく、研究計画書と面接のみの方式が選択できるように改革された。これは専門職大学院ではなく、従来どおりの課程制大学院の範疇に入るが、講義の半分近くをお役人、ビジネスマン、ジャーナリストなどの外部講師が担当している。また、経済学研究科の中に、02年度からは計量経済学を専攻するエコノメトリック・コースが、03年度からは金融実務の講義に重点を置いたファイナンス・コースが設けられ、「神田開講」科目は内容的には専門職大学院のそれにかかなり近づいているといえる。

こうして開講以来4年が経過し、この春には5期生を迎えているが、その「客層」は大きく分けて次の4種に分類できる。第1は、文字通りの現職社会人である。修士号の取得を目的とし、できれば博士課程に進学したいと考えるシンクタンクのアナリスト。地域開発に携わり、経済学的な視点からその領域を深めて生きたいという区役所の職員。金融の知識を深めたいという証券会社の社員。金融周辺の企業に勤めており、できれば金融関連企業に転職したいと考える人、など多種多様だ。

第2は、リタイア組だ。実は、私の「一番弟子」、つまり私が論文指導して初めて修士号をとった学生は、当時55歳。長年勤めた繊維メーカーを、定年を1年前に辞めた人で、「わが国繊維産業の再生策」をテーマに修士論文を書き上げた。勉学意欲は旺盛で問題意識も高いのだが、文章力がいま一つ。ワープロA4で70枚を超える文章を真っ赤にしなければならなかったのには、いささかまいった。また、この4月に無事修士号を取得した某氏は、大手建設メーカーを退職した65歳だ。「六大企業集団の変遷と展望」が修士論文のテーマだったが、40数年前に書いた学部卒業論文の続編を書くという「夢」を実現した。

第3は、学部を卒業したての、いわば専業学生である。彼らは、当然社会人大学院生ではない。が、主として「神田開講」科目をとり、むしろ社会人を学友として勉強している。ファイナンス・コース所属の場合には、金融の知識面で社会人とのレベルの差を縮めるのにやや苦勞している姿を目にするが、社会人の中に混じって勉強できることの効用はかなり大きいように思われる。

第4は、中国からの留学生であり、これが一大勢力を形成している。彼らは押しなべて日本語が達意であり、学力も平均すれば日本人の専業学生より高い、というのが実感だ。昨今、アメリカに留学する中国人学生が多いなか、日本に来てくれる彼らがあるのである。もっと彼らの勉学環境を整え、きちんと教育してあげないと、やがて日本は見限られてしまうのではないかと、という焦燥感に駆られて仕方がない。

私は、この5年間のうちに以上4種類の学生=お客さんを、すべて指導する経験を得た。しかし、これからは、マーケットをこのうちのいくつかに絞っていくと同時に、他校との教育コンセプトの違いを明確に前面に押し出すことが必要となるだろう。多くの大学が、同様に社会人大学院への参入を進めつつあるからである。いまわれわれは、本学教授陣の

特性やブランド力に合致した「客層」や教育コンセプトを確立する作業を進めている。

それにしても、こうした大学間競争で、消費者がよりよいサービスを楽しむようになっているのは確かである。15～20年前にこうした環境が整っていれば、私も銀行に通いながら修士や博士の学位にチャレンジしていたことであろう。

## 炭

(財) 国際開発センター 理事 豊間根 則道

去る9月、小学校を訪ねてタンザニアの内陸を二週間走り回りました。その旅の見聞から。

タンザニアの幹線道路を走ると道端に白い大きな袋が立っているのをよく見かけます。中に入っているのは炭です。炭商人がトラックで買い付けにやって来るのを待っているのです。実際、ダルエスサラームに向かって道を走ると、炭の袋を六段、七段重ねに満載してのろのろ走るトラックを何台も追い越すことになります。途上国では都市部の家庭燃料に炭がよく使われており、ダルエスサラームも例外ではありません。他方、自給自足農民にとっては炭が数少ない現金収入源の一つです。特に乾季には農作物がほとんどできませんから、炭が売れるのは非常にありがたいはずです。人里離れた辺鄙なところで、はち切れんばかりに炭の詰った袋がぼつんと一つだけ道端に立っている脇をしばしば通り過ぎましたが、その炭を焼いて詰めてそこまで運んで来た農民の、現金を稼ぎたい必死な思いがひしひしと伝わって来るようでした。

炭を入れている白い袋はプラスチックの細い紐を編んでできたなかなか丈夫な袋です。何かの袋の転用だろうと思います。炭を詰めると円筒状になり、直径が50センチ、高さは1メートル20センチほどになります。おもしろいことに炭は必ず袋の口から溢れるほど山盛りに詰めてあり、袋の端にいくつもあけた穴を細縄で順にかがって網状の蓋をしています。口からはみ出して盛り上がった炭が、多いときには20センチほどにもなっています。

そんな袋がぼつんぼつんと道端に並んで立っているのです。炭焼きが盛んと思しい辺りの村を通ると、それこそ100メートルおきに10袋、20袋とまとまって立っています。ただし、そこに豊かな林があるわけではありません。サバンナか、それよりちょっと雨の多いくらいの地帯ですから、林といっても背の低い木がまばらにはえているだけです。乾季の今、水気は全くありません。木も葉をすべて落としてじっと耐えています。そんな中で作られている炭です。

しかし、ふと気がつきましたが、この炭袋、なぜかどれも立っているのです。地面に寝かしてあることがありません。最初、それは車の通行の邪魔にならないようにとの配慮か

らかと思いましたが、道端でなく、少し引っ込んだ場所に置いてあってもやはり立っているのですから、それでは説明になりません。さらによく気をつけて見ていると、中にはわざわざ袋の下に石を敷いて座りをよくしたり、さらには細い木の枝でつかい棒をしたりしているものがあるのに気がつきました。明らかに何か積極的に立てる理由があって立ててあるのです。なぜなのでしょう。なぜ炭袋は立ててあるのでしょうか。

地面の湿気を嫌うため？ いえ、今は乾季の真っ最中で湿気など微塵ありません。横にすると重みで炭が砕けてしまうから？ いえ、炭を運んでいくトラックはどれも袋を寝せて山積みしていますから、これも当りません。うーんと考えてしまいました。

考えあぐねつつさらに目を凝らして行くと、珍しく炭袋を横に寝かして置いてあるところがありました。ただ、不思議なことにそこでは地面に直に置かずに古タイヤ、それもかなり大きなタイヤの上に二段重ねで置いてあります。横にすることが稀にあることは分りました。しかし、この古タイヤは何を意味するのでしょうか。

実は今度の旅では途中からこの謎に気がついて、後半一週間はずっと道端を注視し続けて来たのですが、横にして置いてある場所を全部で四個所見かけました。そのうち三例までが古タイヤの上に置いてあったのです。残り一例は、道端にしつらえた木の台の上に寝せてありました。そのどれにも共通していたのは、寝せるときは袋を二段重ねにしているということです。

さて、ここからが私の推理です。

炭袋が道端に整然と立って並んでいる姿にはある意志を感じます。一体その意志とは何なのでしょう。

今私の考えるところでは、それは「目立つこと」なのではないかと思います。つまり、遠くからよく目立つように、炭商人が見落として過ぎないようにという計らいなのでしょう。道端に直立する炭袋は「炭あります」という看板そのものなのです。いつ来るとも知れない商人を待ち、一日でも早く、1 シリングでも高く買って欲しい農民の切なる思いが、このつかい棒をしてまで立たされている炭袋には込められているように思います。実際、立っている白い袋は道を走っていても遠くからよく分ります。ですから横に寝かす場合は必ず何かの台の上に載せ、さらには二段重ねにしてやはり目立つようにしているのでしょう。

そのことに気がつけば、なぜあんなに炭を山盛りにして詰めているのかの理由も察しがつきます。それは多分、買付け商人への必死のアピールなのでしょう。どうせ一袋一律いくらの井勘定のはずですから、多く詰めればそれだけ農民には損のはずですが、買手市場になっていて農民は弱い立場に置かれているため、少しでも盛りをよくしてアピールしないと買い取って貰えない、あるいは安く買い叩かれる仕掛けになっているものと推察しま

す。限界ぎりぎりまで炭を山盛りにした姿にも農民の意志は働いているわけです。

実はまだもう一つ不思議なことがあります。この炭の袋の近くに人の気配が全くないことが多いのです。農家の前の道端に立っているのならまだ分ります。家に誰かがいて、車が停まった気配がすれば外に出てくるのでしょうか。しかし、辺りを見回しても家はおろか人影一つ見えないということがよくありました。炭袋だけがしーんと立っているのです。誰かがそっと車に積んで運び去っても分らないのではないかと心配になります。タンザニアにはそんなよこしまな心を持つ人はいないのでしょうか。仮にそうでも、これでは炭の買付け人が来ても金を払うに払えないではありませんか。あるいはどこか遠くにいる人が、兎のように敏感な耳を澄まし、鷹のように澄明な目を凝らしてじっと道路の気配を窺っているのでしょうか。こちらの謎はついに解けぬままに終わりました。

## タシケントからスコピエへ

EBRD スコピエ事務所長 中澤 賢治

この週末に 5 つのスーツ・ケースと 2 匹のウズベク犬を連れて、妻と 2 人でタシケントからスコピエへと大移動を行いました。犬の旅行は飛行機に載せるために専用のおりを用意したり、ウズベキスタン、マケドニア双方の検疫関係の書類を用意したり、中継地のイスタンブールで一泊したホテルに犬も泊れる部屋を用意してもらったり、合計 7 つの大荷物を異動するミニ・バンを予約したりと初めてのことで大変でした。

生後 1ヵ月半のウズベク犬を妻がタシケントの青空市（チジコフカ）で買って来たのは 2001 年の暮れのことでした。雑種のテリアらしき犬の兄弟の中で一番強そうでした。それが兄のチビ太だったそうです。生まれたばかりのチビ犬が一匹ではかわいそうだからと翌週末の青空市に行って、兄弟犬がまだ残っているか妻が見に行くと、ちょっと弱そうで小さな弟が売れ残っていたので家に連れて帰りました。しっかりした兄に比べ弟のほうは頼りなげな様子で、オソ松と名付けました。こうしてちび太とマッツはわがやのメンバーになったのでした。

妻と 2 人でタシケントに赴任したのは 1999 年の 4 月のことでした。初めて空から見たタシケントの夜景は、予想外に大都会。さすが旧ソ連 4 番目の大都市でした。赴任直後に EBRD 総裁のタシケント訪問があり、カリモフ大統領との会見準備など緊張の連続でした。総裁のお供でチムール帝国の古都サマルカンドを訪問。青いタイルの遺跡が美しく心に残りました。そうしてタシケントの生活が始まりました。外国人社会の様々なパーティーに招かれたりする他には、これといってすることの無い毎日です。

ロンドンの本部と現地政府等との間でなかなか進まない仕事にいらいらするのは毎日のことで、かえって気がまぎれるぐらいです。むしろ大変なのは日中を家で過ごす妻の不満がたまらない様になることでした。タシケントは砂漠の国の首都のイメージがありますが、実際

には天山山脈のふもとのオアシス都市で、水が豊富で緑の多い美しい街です。夏には 45 度を越す陽光のおかげで様々な花にあふれ、バザール(市場)に出まわるスイカ、メロン、トマトなどは日本では期待できない程すばらしいものです。借家の庭にサクランボや杏の実がなったり、色とりどりのバラの花を植えて庭仕事をするのは良いなぐさめとなりました。

タシケントの強味は以上のような自然の恵みに加え、中央アジアの代表都市として文化、教育の水準が非常に高いことです。ウズベキスタンが世界地図のどこにあるかを知らない人が多くいる一方で、シルクロードの遺跡、サマルカンド、ブハラ、ヒバなど古都の歴史を井上靖氏の小説・紀行で読んだり、NHK のテレビ・ドキュメンタリーでみたりして一度旅して見たいと思っている人はたくさんいます。私は本部からの出張者の案内やら、職場の仲間との遠足などで何度となく足を運ぶことが出来たのがとても嬉しいことでした。タシケントには多くの大学があり、非常に高い水準の音楽・スポーツの指導者がいることも幸運でした。妻はピアノ、テニスのレッスンを楽しみ、私はロシア語、歌、ゴルフのレッスンを本格的に楽しむことが出来ました。時にここ 2 年くらい少しロシア語が理解できるようになってから熱中したのはナポリ民謡をロシア語で歌うことと、ロシアのロマンス(歌曲)を歌うことでした。

タシケントにくる前の欧州(ロンドン、ウィーン)の生活に比べると、非常にものの乏しい、不便な生活であり、妻はここ 2 年くらい「いつになったら新しい国に行けるのかな。」というのが口癖になりました。私にとっては仕事以外には、家にいる時間が長くなり、必然的に家で楽しめる時間の使い方として歌の楽しみを見つけたり、二人共にとって黙って不平不満を聞いてくれたり、遊んだりする愛犬の存在がなくてはならぬものになるという新しい発見の日々となりました。

仕事の面では 2001 年秋のアフガニスタン情勢の変化以来、隣接する中央アジア全体に対する世界的な関心が高まり、タシケント事務所を訪れる人の数もずいぶん増えました。

その後の 2003 年 5 月の EBRD タシケント年次総会の準備、引き続いての対ウズベキスタン EBRD カントリー・ストラテジーのモニタリング(2004 年 4 月記者発表)まで忙しい日々が続きましたが、今はずいぶん静かになってしまいました。

さて以上長々とタシケントの思い出話になってしまいました。今度のスコピエ勤務ではマケドニアとコソボを担当することになります。スコピエにお立ちよりの際は是非お立ちよりください。メール・アドレスは以下の通りです。

[NakazawK@skp.ebrd.com](mailto:NakazawK@skp.ebrd.com)